

岩間寺

岩間寺は、大津と宇治の市境に近い、大津の南にある山中に位置しています。この寺は、722年に泰澄（682-767年）が創建した真言宗の寺院で、正式には正法寺として知られています。泰澄は、元正天皇（683-748年）の病気を治したことで、この寺院の創建を許可されました。

泰澄が寺院の創建にこの地を選んだのは、この地は桂の木（*Cercidiphyllum japonicum*）が豊かだったからだと言われています。言い伝えによると、泰澄は慈悲の菩薩である観音の真言が木々から聞こえてきたことで、この地が神聖な場所であると考え、そこに聖域を設ける許可を願い出たと言われています。境内の裏手には、樹齢500年以上ともいわれる桂の巨木があります。その幹は、絡み合った太い枝に分かれており、その前には木の神を祀った祠が立っています。

岩間寺の本尊は、元正天皇が崇拝していた、高さ15センチの金銅でできた千手観音像です。この観音像は、かつては泰澄が地元の桂の木から彫ったとされる木彫りの観音像の中に安置されていたが、この木像は現在は失われてしまいました。金銅の観音像は1577年に再建された本堂に安置されています。建物は参拝者に公開されていますが、観音像は公開されていません。本堂内にあるより大きな観音像は公開されています。

毎晩、観音像は本堂の外へと飛び出し、魂を救うため地獄に下りていると言われています。観音様が毎朝戻ってくる際には、この奮闘によりびしょりと汗をかいていると言われているので、このことから、別名「汗かき観音」とも呼ばれています。

岩間寺の観音様は、魂を救うだけでなく、ボケ封じにも効果があるとされています。本堂前にある大きなお堂では、観音様に老いの防止を祈願する特別な儀式が行われます。参拝者は観音像と向かい合って立ち、頭上に思考力を高めると言われている大きな素焼きの皿をのせます。このお堂の向かい側には大師堂があり、そこには泰澄と真言宗の開祖である空海（774-835年）の彫刻が展示されています。

本堂の横には小さな庭園があり、その池では鯉が泳いでいます。この池は、俳人・松尾芭蕉（1644-1694年）の最も有名な俳句のひとつ、「古池や / 蛙飛びこむ / 水の音」のきっかけになったと言われています。芭蕉は大津にある寺院をよく訪れ、岩間寺に滞在した後

にこの句を詠んだと考えられています。庭の大きな石の上に置かれた銘板には、この句が刻まれています。